

□海外文献紹介□

上部消化管出血の原因としての  
angiodysplasia

Angiodysplasia as a cause of upper gastrointestinal bleeding: Clouse RE, Costigan DJ, Mills BA, et al (Arch Intern Med 145: 458-461, 1985)

胃と小腸の近位部分の angiodysplasia は、近年上部消化管出血の原因として知られるようになった。同様な血管病変が結腸ではよく知られているが、これらの恐らく後天的と思われる異常の原因はわかっていない。大動脈弁疾患との関連が言われている。1981年までに報告された症例の15%で、大動脈弁疾患が合併し

ていた。結腸の血管病変は、通常大動脈弁狭窄のある老人患者で発見されている。

1979年に胃の angiodysplasia が、大動脈弁疾患患者で報告された。また、上部消化管出血を起こした長期透析患者グループで、胃に同様な血管病変が発見されている。

この報告では、4か月以上にわたった上部消化管内視鏡シリーズで、30人の患者に上部消化管の angiodysplasia を診断した。同期間に上部消化管出血の疑いで内視鏡検査を受けた676人の4%に相当する。うち23人(77%)では、診断以前に少なくとも1回の肉眼出血(吐血または下血)がみられた。多発性の胃・

十二指腸の angiodysplasia が、19人(63%)の患者で発見された。更に大腸内視鏡検査を受けた12人中6人に結腸の angiodysplasia が発見された。

腎不全が、他の原因で上部消化管出血を起こした同年齢のコントロール群より angiodysplasia の患者で有意に多く認められた(60% v 24%)。

そこで著者らは次のごとく結論している。angiodysplasia はまれであるが、上部消化管出血(顕出血および潜出血)の鑑別診断において考慮されるべきであり、腎不全との関連が考えられる。

(愛知県がんセンター第1内科

小林世美 抄)